

シンポジウム

ペドロロジーの挑戦 —土・ヒト・社会—
国際土壌年 2015 を越えて田村憲司*¹・大倉利明*²・森 圭子*³A new challenge of pedology – Soil · Human beings · Society –
Beyond the International Soil Year 2015Kenji TAMURA*¹, Toshiaki OHKURA*² and Keiko MORI*³*¹ University of Tsukuba*² National Institute for Agro-Environmental Sciences*³ Saitama Museum of Rivers

2013年第68回国連総会において、2015年を「国際土壌年」とすることが決議された。その背景には、地球規模での気候変動や自然災害の甚大化、環境の劣化が21世紀を迎えてますます懸念されていることがあげられる。日本ペドロロジー学会は、前身のペドロジスト懇談会の発足から50有余年になり、土壌の「なぜ?」、「なに?」を問い続けてきた。土壌は生命を育み、生態系の基盤となっていて、人類の生存にとって欠かすことができない。この機会に、我が国のペドロロジーの役割とこれからペドロジストがなすべきことについて深く議論し、「国際土壌年」の先にある土・ヒト・社会のありようを考えることを本シンポジウムの趣旨として開催した。ペドロロジーが果たしてきた社会的役割、果たすべき課題について様々な角度から掘り下げることによって、2015年、国際土壌年を超えて、私たちペドロジストが進むべき道を見据えていこうと考えた次第である。このような観点で、久馬一剛先生、永塚鎮男先生、袴田共之先生、安西徹郎先生にご登壇いただいた。

久馬先生には、「草創期日本土壌学とペドロロジー」と題して、わが国の江戸期末からのペドロロジーの歩ん

できた道を、土壌認識、農学の中の土壌、農芸化学における土壌・肥料学、土性調査事業に始まる土壌学等、詳細にご講演いただいた。わが国のペドロロジーがどのような変遷を経て今日に至ったかについて深く知ることができた。永塚先生には、「我が国の土壌分類体系と国際分類体系との整合性を目指して」と題して、ペドロロジー学会が、今、取り組んでいる「日本の統一の土壌分類体系」の確立にむけて、解決しなければならない分類学的課題についてご講演いただいた。袴田先生には、『土の百科事典』にみる“土壌と文化”と題して、丸善出版から発行された『土の百科事典』を通して、「土と文学」について、また「土と音楽」、「土と民俗」について、幅広い角度からご講演いただいた。安西先生には、「土壌断面から作物生産性を読む—ペドロロジーの視点を生産現場で生かすために—」と題して、生産現場において、土壌断面調査に基づく土壌診断事例をご紹介いただき、さらに、土壌断面観察から生産者と話ができる人材の育成についてご講演いただいた。

今回のシンポジウムは、国際土壌年の幕開けにふさわしい非常に意義深いシンポジウムとなった。ペドロジストやこれからペドロロジーを目指す若い方々にも是非、ペドロロジーの意義を考えていただけたら幸いである。

*¹ 筑波大学生命環境系 (〒305-8572 つくば市天王台 1-1-1)*² 農業環境技術研究所 (〒305-8604 つくば市観音台 3-1-3)*³ 埼玉県立川の博物館 (〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町小園 39)

2015年10月19日受付・2015年10月19日受理